

日本における女子野球に関する研究

—女子野球誕生から女子プロ野球成立過程について—

田中亮太郎

I. はじめに

近年、日本国内における女性のスポーツ活動への進出には目覚ましいものがある。その多くが文化・社会・経済などの社会的事情や社会的諸制度の変化と深くかかわりあい、女性の社会進出にともなう女性意識の改革によるものと考えられる。

今年で戦後五十年を迎える。日本国憲法における法の下の平等の理念の元に、女性は政治的・社会的・経済的に大きく変化してきた。女性の政治参加が認められるようになった参政権を獲得してからも同じく五十年を迎える。女性の参政権獲得は戦前の男尊女卑の社会構造に革命を起こすこととなった。昭和四十七年には、女性労働者の職業能力の開発及び向上、職業生活と家庭生活との調和を図る等を目的に男女雇用機会均等法が制定され女性労働者の基盤が確立された。この五十年、女性の社会進出は一步步確実に進められてきた。その歩みの中でも大きく飛躍する切っ掛けとなったのは昭和五十年の国際婦人年（1975年）である。この年を契機に女性の意識改革が図られ、女性の社会進出が加速することとなった。女性の経済的自立・安定を背景に女性独自の文化・社会を構築することとなっていく。いわゆるウーマンリブパワーの台頭である。国際婦人年から二十年、女性の意識は確実に変化してきた。そうした変化の一端を女性のスポーツ活動への進出にも見ることができる。

現在、日本国内では多種多様なスポーツが実施されている。その特徴としては大衆化・日常化があげられ、日

常生活においてスポーツがライフスタイルとして定着してきた。そうした中、女性のスポーツ人口が急増しスポーツ年齢層が変化したことやスポーツ種目の多様性が特徴としてあげられる。女性のスポーツ活動は、昭和五十年以前は学校体育や課外活動を行う中・高校生を中心とするスポーツ年齢層であったが、昭和五十年以降は女性の社会進出にともない社会生活や家族生活における社会的な変化により成人から壮年にいたる幅広いスポーツ年齢層に変化してきた。スポーツ種目についても、昭和五十年以前は男性のスポーツ領域・女性のスポーツ領域という規制概念が社会一般に存在したが、昭和五十年以降は男性のスポーツ領域と考えられていた野球・ラグビー・サッカーなどに進出し、男女間の性差によるスポーツ領域の規制概念を打ち砕くこととなった。

最近、女性の野球選手がマスコミの話題となることが多い。昨年誕生したアメリカの女子プロ野球入団への日本人女子選手の挑戦、神宮の大学野球にアメリカの女子選手誕生などである。戦後、日本国内においても女子プロ野球が実施されている。戦前の学校体育においても女子野球が実施された記録がある。こうした点に着目し、本研究において野球が日本に紹介され国民的スポーツとして発展していく中で、女子野球誕生から女子プロ野球成立までの過程を、社会的思想の変遷や教育制度の改革などがどのように影響したか検討を加え明らかにすることを目的とした。

Ⅱ. 明治維新と女子スポーツ

(1) . 文明開化による女性思想の変遷

明治維新以後、文明開化とともに西洋文化の流入により、経済的発展や生活様式の変化だけでなく、政治や社会思想にも大きな変化を与えることとなった。藩閥・軍閥・官僚・特権の上流階級層による「鹿鳴館時代」に象徴される西欧文化主義の到来であった。こうした西欧文化主義の中で、女性の社会的思想も確実に変化し始めた。

明治二十二年、十七歳の木村曙により女性による最初の新聞小説として読売新聞に「婦女の鑑」の連載が開始された。主人公は英国に留学。卒業後は米国に渡り、手芸技術と工場経営を学ぶ。帰国して手芸工場を設立、貧しい女性の経済的自立を助けつつ、工場内に幼稚園もつくるといふ話である。木村曙は東京高等女学校で英仏語に優れ、希望した留学を実現できなかった思いを込めた作品であった。¹⁾当時の女性の社会的地位を批判しつつ女性の意識改革をうながし、女性の社会的自立をはかる切っ掛けを与えるものであった。明治三十三年には、野口幽香が米国で貧民幼稚園の研究をした森島みね子とともに東京麴町に二葉幼稚園を設立する。六年後には貧民街に移り、働く母親たちのために乳児も預かるようになり、現在の保育園の前身となる。大正五年には、実態に合わせて二葉保育園と改称され日本最初の保育園となる。²⁾木村曙が小説に思いを込めた女性の社会的自立をはかるには経済的自立をはかることが最も重要と考え、女性が経済的自立をするための育児の援助をしていくこととなった。こうした女性達の意識改革ともなう自立心の向上から女性解放運動へと発展していく。

明治四十四年には、自由民権運動から女性解放運動へと進んだ福田英子が「世界婦人」誌を創刊し、女性の政治上の権利獲得や、家制度からの解放や恋愛の自由を訴え、海外の婦人参政権運動の紹介もした日本最初の社会主義的な女性雑誌の発刊であった。³⁾世界的には、明治二年(1869年)にイギリスのJ.Sミルにより「女性の解放」が出版され婦人参政権運動の発端となる。明治二十六年には、ニュージーランドで世界最初の婦人参政権を獲得

することとなった。「世界婦人」誌発刊当時、西欧を中心に婦人参政権獲得運動が活発に行われており、日本にも女性解放思想を流入することとなる。

(2) . 教育制度と近代スポーツの普及

明治政府は国民教育を進めるため、明治四年に文部省を設置し、翌年には全国的に統一された日本初の教育制度として学制を頒布し近代学校教育の基礎を築いた。学制の中に「体術」として体育教育が定められることにより学校体育の幕開けとなった。政府は近代学校教育の充実を計るため、明治九年に文部省の大丞(現在の局長クラス)田中不二磨を教育視察のため渡米を命じ報告を受けることとなった。⁴⁾その報告により文部省において体育行政の専門機関の設置が叫ばれ、明治十一年体操伝習所が設置された。アメリカ人教師ドクトル・リーランドによりスウェーデン体操やテニスなど近代スポーツが紹介され、これを契機に日本の本格的な学校体育の幕開けとなった。しかし、解剖学や生理学の医学的理論に基づく身体運動の基本形式(体操)が学校教育の基本と考えられ、学校体育の教材として体操がその中心となり、体操以外の教材は「遊戯(球技)」として補助教材として扱われることとなった。⁵⁾そのため体育教師リーランドの紹介したテニスは早くから国内に普及することとなったが、開成学校の数学教師ウィルソン、開拓使仮学校の英語教師ベーツなどのアメリカ人教師が紹介した野球など遊戯全般の普及は遅れることとなった。

明治十九年の学校令において兵式体操が正式に学校体育の中に位置づけられることにより、男子は国策として体格・体力の向上を目的に盛んに行われたが、女子は伝統的な女らしさの観念から優美さを養うことが好まれたため体育は軽視されていた。しかし、良妻賢母の教育とそれともなう女子の体格・体力の向上に適した体育が求められるようになり、政府は明治三十二年に井口あくり(当時、毛利高等女学校教頭)に女子体育研究のためアメリカ留学を命ずる。将来の女子体育の第一人者となるべく渡米し、スウェーデン体操を学び四年後に帰国し東京女子高等師範学校の教授として女子体育の指導法の改善に努め、今までの女らしさの観念のもと女子体育軽

視の体制を厳しく批判した。女子の体格・体力の改善は活発なる運動に即した体操服が必要不可欠と提案し、留学先のボストン大学より持ち帰った体操服を採用した。ボストン大学の体操服は、アメリカの女性解放運動家であったアメリア・ブルマー夫人の考案したものであった。⁶⁾この後、体操服は全国の子供体育の現場に急激に広がることとなった。外国の女性解放運動が日本の女性スポーツ解放に大きく影響を与えることとなった。明治三十七年文部省の「体操遊戯取調委員会」委員に任命され、翌年文部省から出された「体操遊戯取調報告」によってスウェーデン体操が学校体育の中に正式に位置づけられることとなった。

大正二年には日本最初の国定の体育カリキュラムとして、永井道明（当時、東京高等師範学校教授）が作り上げたスウェーデン体操を基本とした「学校体操教授要目」が文部省より出され、これにより明治・大正・昭和初期の日本の学校体育にスウェーデン体操が大きな影響を及ぼすこととなる。

（３）．近代スポーツと女子

文明開化の潮流にのり西洋文化が国内に取り入れられるとともに西欧スポーツが日本に紹介されるようになった。野球・テニス・陸上競技・登山などがいち早く紹介され、その中でも野球とテニスの発展は著しくその発達過程において日本独特の軟式野球・軟式テニスが生じていったのである。テニスが他のスポーツよりいち早く日本国内に普及することとなったのは、国内で唯一の国立体操学校である体操伝習所の体育教師リーランドの紹介による影響は大きい。体操伝習所は明治十七年に東京高等師範学校（後に文理科大学を経て東京教育大学）に併合されたが、テニスは高等師範学校の学生達の間で盛んに行われた。しかし、ボールの破損・紛失など用具の補給に学生達は困ったことと思われる。アメリカから取り寄せれば値段が高くなる。そのため学生達はボールの代用品として子供達の遊び用のゴムボールなどで行ったものとする。それがけっこう用をなし、このボールに改良を加えればと考え、明治二十三年に東京高等師範学校の体育教師坪井玄道が三田土ゴム会社にテニス用ゴムボールの製造を依頼する。これが日本独特の軟式テニス

の誕生である。⁷⁾学生達は、卒業後は全国各地の中学校・高等学校・女学校の教員として赴任し、自らがテニスを愛好するだけでなく体育授業や校友会活動などで指導し急速に普及することとなった。野球もこの時期に校友会活動として学生野球チームが誕生してくる。学校体育の中心となる兵式体操では、スポーツの新鮮さ、スピード性、知性、技術性、娯楽性など学生の心を満足させることは出来ず、校友会運動部活動の中で近代スポーツが発展してきた。特に野球は人気が高く、明治三十六年の第一回早慶戦では観衆約三千人と記録にある。当時の社会状況から判断して、野球人気がたいへん高かったことが推測できる。

近代スポーツの中で、女子にはテニスが最も普及していったことはその普及経路からして言うまでもない。また軟式テニスの開発により用具の確保だけでなく、女子にとって極めて危険性の低いスポーツである。野球は、ボールの硬さ、スピードなど女子にとって危険性の高いスポーツと考えられたため、女子に普及した記録はない。そのためか、野球は男性的スポーツ、テニスは女性的スポーツと一般的に考えられていた。当時のスポーツ雑誌にも野球・テニスが記事の中心として掲載されている。その中で野球とテニスをいろいろな角度で比較している記事がある。明治三十九年の「武俠世界」では、野球を男性的としたならば、テニスは女性的かもしれないが、それは外見的に言われるもので内容的には女性的要素はない。それはテニスを知らない偏見者の意見である。と言う内容の記事が掲載されている。また「運動界之裏面」（うんどうかいのうらおもて）では、野球は誰でも出来る運動ではない、しかしテニスは老若男女誰でも出来る運動である。また野球の規則は難しく覚えるのにも苦労するが、テニスの規則は簡単で覚えやすい。そうしたことが女子学生がテニスに熱中する理由である。と言う記事が掲載されている。いづれの記事も当時の国内におけるスポーツの普及状況や世間一般のスポーツ感などが想像できる内容である。

Ⅲ. 大正デモクラシーと女子スポーツ

(1) . 大正デモクラシー運動と女性思想の変遷

明治四十五年七月三十日に明治天皇が崩御され、ここに新たな大正時代を迎えることとなる。大正時代に入り、明治時代とは違う新しい自由主義運動が展開される。第一次世界大戦の軍需景気による産業発展に伴い国内に経済的繁栄をもたらした結果、産業労働者を中心とした中産階級層を形成し知識階級層を増加させ世界的なデモクラシー運動の思潮的影響を受け、新しい民主主義運動として全国に展開された。これが大正デモクラシー運動である。政治・経済・教育などの社会生活面から自由・平等・人格の尊重などの精神面にいたる広義にわたり運動された。そうした自由主義的影響を受けて、いままで上流階級層と学生が中心であったスポーツも国民の諸階級層に普及発展していくこととなった。⁸⁾

「世界婦人」誌の創刊によって、福田英子は社会的・政治的観点から全国の女性達に女性解放を訴えることにより、女性達は勇気づけられ意識改革をはかることとなり、女性の革新運動を開拓し押し進めることとなった。女性解放の問題の中で重要な点として経済的自立や職業の拡大が叫ばれ、女子工場労働者の待遇改善や女子の職業教育、婦人労働者の保育負担の軽減など全国で大衆運動や労働運動が盛んに行われることとなった。そうした社会の要望に行政機関として答えるべく、大正八年に大阪に我が国初の公立託児所が開設された。野口幽香・森島みね子による二葉幼稚園（実態は保育園）開設より遅れること約二十年、行政による女性労働者政策の遅れと考えられる。

(2) . 女子体育の振興

大正元年十一月二十日、二階堂トクヨ（当時、高知県尋常師範学校教諭）は文部省留学生として女子体育研究のためイギリスに出発する。キングスフィールド体操専門学校の校長マダム・オスターバークに一年半にわたり指導を受けた後、イギリス国内の体操学校を巡り、大正四年四月に帰国する。マダム・オスターバークは解剖学・

生理学に精通した科学的な体育指導と婦人解放の視点に立つ教育観を持った女性であった。また、当時の欧米諸国の体育は、体操を中心とした時代は終わり遊戯（球技）が中心的存在となっていた。⁹⁾帰国後、東京女子高等師範学校の教授となりイギリス留学で学んだフォークダンス・器械体操をはじめ、遊戯（球技）では日本最初の女性のスポーツとしてクリケット・ホッケーを紹介した。

大正十一年四月、二階堂体操塾を創立。二階堂トクヨは常々「女子体操は女子の手で」、「国家の隆盛は女の健康から、女を知るのは己です。」これは当時の数少ない女性体育教師の共通意見と考える。当時の学校体育は男子体育が主として考えられ、その中から女子に必要なものを女子体育に取り入れるという考えであった。また女子体育を指導する教師の大半が男子であり、女子の身体特性を十分把握できず女子体育の適切なる指導が不十分であったことに対する批判であった。そうした問題を改善すべく女子体育の指導者養成学校を設立したのである。当時、教育界・体育界の有識者から女子体育の促進を促す意見が相次いだ。大正十二年の雑誌「野球界」に掲載された意見から要約して記載する。可兒徳（東京高等師範学校教授、文部省「体操遊戯取調委員」）は、「欧米の女子の体格と比較して日本の女子は非常に劣る。女子が虚弱では駄目だから、是非女子の運動を盛んにせねばならない。」「日本の女子は女学校にいる間は少しは運動するが、卒業後は運動しなくなる。これは日本の生活習慣が原因で、運動しやすい服装に替えるなど生活習慣を改善しなくてはならない。」「最近、女学校の体育熱が盛んになってきたが、一般生徒全部が運動しなければ体育の目的は達せられない。」¹⁰⁾など女子体育の現状を批判し、社会的な女子体育に対する意識改革を提唱するとともに女子体育促進の必要性を訴えている。横井鶴城（雑誌「野球界」主幹）は、「体育に男女の差別無し。欧米諸国は体育に対して男女平等である。日本は女子体育の振興に一層の努力をしなくてはならない。」¹¹⁾と、日本の体育界の男子主流的な観念を批判しつつ女子体育の促進を訴えている。当時の女子体育が「女らしさ」という日本古来の観念に支配され、女子体育の指導方法や女子に適した遊戯（球技）の選択や開発に障害となったことと考

えられる。

(3) . 女子野球誕生

明治時代後半から学生野球が国内に発展するに従い、その野球人気は子供や大人達の間の日増しに高まり全国各地で野球の真似ごとや野球遊びが盛んに行われるようになった。そうした野球人気は女子においても野球熱を高めることになっていく。女子における野球人気の高まりにより高等女学校の体育授業の中にインドアベースボールが盛んに取り入れられる。インドアベースボールとは簡易野球と言われ、バットと柔らかいゴム製の大きなボールを使用することによりグローブやミットなど用具を使用しなくてもでき、女子にとっては危険性の極めて低い遊戯(球技)であった。ルール面では野球より塁間が短く、投手は下手投げ、盗塁の際はリード禁止という三点が野球と違う以外は野球と同じルールであった。¹²⁾

明治四十四年一月発刊の雑誌「野球界」に米国球界珍聞という記事が無念坊(記者のペンネームと思う)という人物により掲載されている。ニューヨークのバーナードカレッジという女子大学に野球が流行し各クラスごとでチームが編成され、学内対抗だけでなく他大学との対抗戦も行っているというアメリカの女子野球人気を紹介されている。日本国内に野球が発展してきた時代に男子と同じボールやルールで女子野球が盛んになることを考えると、さすが野球発祥の国アメリカと驚くばかりである。その女子野球人気についてコロンビア大学助教授エッガーフォーベルの意見が掲載されている。男子学生より女子学生の方が野球技術の習得は早いと述べている。女子学生の体格・体力を考えれば、塁間を短くし、ボールを柔らかい軽いものを使用し、バットも軽いものを使用すれば女子野球はより盛んになるだろうと述べている。

大正七年には、投げやすく、耐久性があり、安全性の高い柔らかい少年野球用ゴムボールが開発されることにより軟式野球が誕生する。大正十一年には青年用ゴムボールが開発されることにより、軟式野球は少年から大人まで幅広い年齢層に全国に急速に普及していった。そうした中、エッガーフォーベルの意見に呼応するように軟式野球誕生にともない高等女学校の女子学生の間にも急

速に女子軟式野球が発展していくこととなった。

女子野球の発祥地は、名古屋であった。大正八年の春には、名古屋新聞社主催で高等女学校野球大会が開催されている。日本で最初の女子野球大会で、これが全国の女学校の野球熱を刺激することとなる。名古屋高等女学校・淑徳高等女学校など四、五校の参加と記録されている。¹³⁾これをきっかけに全国の高等女学校に急速に野球チームが誕生していった。大正十一、二年頃には、関東地区では、栃木県の宇都宮高女・栃木高女、茨城県の水戸高女、東海地区では、愛知県の名古屋高女・淑徳高女・岡崎高女、関西地区では、大阪府の市岡高女・堺高女・岸和田高女・泉南高女、和歌山県の和歌山高女・橋本高女・粉河高女、奈良県の桜井高女などが活発に活動しており、関東・東海・関西を中心として女子野球が発展していった。それは名古屋高女の越原和校長のように自らバットを持って指導するだけでなく体育授業の教材として導入し女子体育の改革を図る熱心な指導者や、関西地区においては大正四年に始まった全国中等学校野球大会の刺激によるものである。女子野球熱は地方にも高まり、東北地区では宮城県の仙台高女、九州地区では、福岡県の直方高女、熊本県の熊本第一高女、上信越地区では、長野県の諏訪高女などで盛んに行われた。¹⁴⁾大正十年に雑誌「野球界」で高女の学生で女子野球団を結成しようと募集したところ、僅か二名の応募しかなかったが、二年後には全国各地に野球チームが誕生した。軟式野球が誕生して僅か四、五年のことであるが、当時の女学生の野球熱には驚くばかりである。因みに、少年用軟式野球ボールを使用し、ルールも少年軟式野球規則を使用していた。

(4) . 女子野球禁止令

女子野球の発展は今までの野球は男子のスポーツ領域的な感覚を打破するもので、女子体育思想に革命をもたらすものであった。しかし、思想革命に対しては肯定派と否定派の両論に別れるものであった。肯定派は、諸外国の女子体育と比較し体育教育の充実を図るだけでなく女性に対する社会的観念の改革を意図するものであった。否定派は、野球は女子の運動として過激を口実に男子の

スポーツ領域的な感覚を維持し女性に対する社会的観念の保守を意図するものであった。肯定派は野球の普及発展を推進したが、否定派からは常に非難を受けることとなった。

大正十年には、栃木県の栃木高等女学校において野球部だけでなく体育授業に野球を導入したところ、女子の運動として過激や女子の男性化を憂う声が学校の内外に起り非難の集中した学校当局は野球を禁止することとなった。大正十二年には、当時の女学生の洋服すら禁止しようとする国粋保存者で有名な福岡県沢田知事は、直方高等女学校に対して野球部の解散命令を下す。大正十四年には、文部省より訓令が出されることにより女子野球は禁止されることとなった。これは日本古来の「女らしさ」と言う社会的観念から因習的な女子の柔順論を保守しようとするものであった。大正デモクラシー運動による女性解放思想に政府機関として歯止めをしようとするものであった。

IV. 皇国主義と軍国主義における女子スポーツ

(1) . 皇国主義と軍国主義における女性思想の変遷

大正十五年十二月二十五日大正天皇が崩御され、ここに新たな昭和時代を迎えることとなる。大正八年の第一次世界大戦の集結により、日本の経済界は大戦景気から一転して戦後恐慌に陥り、労働争議が頻繁に行われ社会的に不安な状況であった。大正十二年九月一日に発生した関東大震災により一時的に震災の復興景気に見舞われたが、経済界は不安定な状況で昭和時代に突入する。昭和四年十月二十四日のニューヨーク株式市場の大崩壊を契機におこった世界大恐慌の影響を激しくうけて日本経済の不況を一層深刻にするとともに国際的地位を不安定にした。政府は、こうした世界的不況の中で日本の経済的立て直しの解決を中国大陸に求めていった。大正デモクラシー運動により高揚した労働運動・社会主義運動と呼応して、昭和二年には女性の参政権獲得を唱える市川房枝ら婦人選挙権獲得同盟の機関誌「婦選」が創刊された。政府はそうした諸運動を押さえるとともに、皇国主義思想の強化を図ることとなった。そうした影響を受け女性解放運動も下火となり日本古来の「女らしさ」と言

う社会的観念が強化されるに従い、社会構造においても「男尊女卑」の傾向が強く打ち出されるようになり、社会における女性の柔順論が尊ばれるようになった。

昭和六年九月十八日に満州事変が勃発し、翌年九月に日満議定書による満州国承認により終結したが国際連盟では承認されず、日本は満州国問題を切っ掛けに国際社会から離脱する方向へと進む。そうした中、皇国主義思想の過激な現れとして五・一五事件（昭和七年）や二・二六事件（昭和十一年）などの一挙に国政を改革しようとするクーデターが続発し、社会不安を与えることとなった。昭和十二年七月七日には支那事変が勃発し、国内は戦時体制づくりとなり軍国主義が至上となる。同年八月には国民精神総動員運動が始まり、翌十三年一月には軍需工場動員法が発令され、同年四月には緊急非常事態時に人的物的資源の運用統制が可能となる国家総動員法が公布され、国家総力戦体制の準備が成されていった。国策遂行の為に学校教育においても戦時体制に組み込まれていった。同年六月九日文部省は「集団的勤労作業運動実施に関する件」を通達し学徒の勤労働員が始まることになった。昭和十四年には大学に軍事教練が必修となり、昭和十六年には「国民学校令」が発令され、しだいに軍事教練が強化されていった。ついに同年十二月八日には太平洋戦争に突入していった。国民玉碎主義の中、昭和二十年八月十五日に敗戦を迎えるのである。こうした戦時体制下では、政治・経済・教育の社会生活面から自由・平等・人格の尊重などの精神面にいたる広義にわたり全てに否定され、男性は兵隊に、女性は銃後の守りにと「良妻賢母」が社会全体の鑑とされた。

(2) . 皇国主義と軍国主義による女子体育・スポーツへの影響

大正後期には国立體育研究所（十三年）などが設立され、体育研究が盛んになり遊戯・スポーツなどが新しい教材として学校体育に取り入れられるようになった。そうした状況から大正十五年に学校体操教授要目が改訂され、近代体操の方法と領域が確立されるとともに、遊戯が分化し新たに「競技」として走技・跳技・球技が加え

は一気に衰退していく。

(3) 皇国主義と軍国主義の中、高まり続ける野球人気

急激に全国に広まった女子野球熱も、大正十四年の文部省訓令により高等女学校の野球部は解散させられた。しかし女学生達の野球熱は衰えることは無く、自分達でキャッチボールをして野球への情熱を燃やし続けた。

昭和時代の幕開けは、日本の野球界の幕開けでもあった。大正四年に開始された全国中等学校野球大会（現在の全国高等学校野球大会）に続き、大正十四年には、日本の野球界発祥と言える東京六大学野球大会のリーグ戦が開始される。昭和二年には、全国都市対抗野球大会が開始される。全国の老若男女に野球人気は高まり続け、それぞれの大会には二・三万人の大観衆で溢れ、まさに野球隆盛期であった。野球人気が過熱しすぎて教育上好ましくない事態が全国で多発した。野球後援会のいきすぎた活動（経済的援助等）、応援組織の過熱（応援団の乱闘事件）、大会数の増加による教育的問題、等により昭和七年三月文部省は「野球の統制ならびに施行に関する件」（いわゆる野球統制令）を発令し、野球の教育的管理を強化することとなった。野球統制令により学生野球は束縛されることとなったが、野球人気は衰えることなく益々隆盛を極め、ついにはプロ野球チーム結成が世間の話題となっていく。

昭和九年六月九日に「職業野球創立発起人会」（のちのプロ野球）が開催され、その二日後には「株式会社・大日本東京野球倶楽部」（のちの東京ジャイアンツ）の事務所が開設された。同年十一月には、アメリカより大リーグ選抜チームが来日し全日本代表野球チームと日米野球大会を全国各地で開催し、全国の野球ファンを魅了し、職業野球チーム設立の気運は一気に高まった。同年十二月には「大日本東京野球倶楽部」が創立され、日本プロ野球の第一号となった。翌年十年十二月には「大阪野球倶楽部」（のちの阪神タイガース）が誕生し、十一年一月には相次いで五球団が誕生し、二月五日には七球団で日本初の「職業野球連盟」が発足した。¹⁵⁾各地の球場は常に満員で女性ファンも多く、女子野球を禁止された女性達も、いつかは女子野球の復活を願って野球熱を燃やし続

られ、学校体育界を活気づけることとなった。同年三月には、二階堂体操塾が日本女子体育専門学校に昇格し、わが国最初的女子体育の専門学校が誕生することになった。これは女子体育の女子指導者達を活気づけることとなった。

昭和初期は国民体育・スポーツの隆盛期であった。昭和三年にはラジオ体操が創作され、学校だけでなく地域社会・会社・工場等に広く普及発展していった。スポーツは、国内においては各競技団体が結成され体育協会加盟団体として発展している。各競技の国際交流も盛んに行われ、オリンピック大会においても、アムステルダム（昭和三年）、ロサンゼルス（昭和七年）に陸上競技・水泳競技などの日本選手の活躍により国民のスポーツ熱の高まることとなった。そうした中で、アムステルダム大会の女子陸上に参加した人見絹枝（日本女子体育専門学校研究生）は、八百メートル競走で銀メダルに輝き女子スポーツを高揚することとなった。昭和五年プラハでの第三回万国女子オリンピック大会（国際女子スポーツ連盟主催）には、国内の経済不況の中、選手の渡航費用捻出のため、女性が女性を送ろうと全国の女学生に募金を呼びかけ、念願の六人の選手団で出発した。女性達で募金運動をして渡航費用を捻出するのは日本で最初のことと思われるが、その女性達の精神には女性解放運動に見られた女性の経済的自立の意識が受け継がれている。

昭和十一年六月には学校体操教授要目が改訂され、精神訓練を重んじ、その方法として団体訓練を重視し、外来語の運動の名称や用語を国語に改めるなど、国防意識の高揚を図ろうとする内容であった。学校体育においては、要目改訂以降は軍事教練の一貫として武道や国防競技などが盛んに行われたが、遊戯やスポーツは急激に減少していった。スポーツ界においては、昭和初期からスポーツ隆盛時代で、その盛り上がりを集結し、昭和十二年には第十二回オリンピック大会（昭和十五年開催）を東京に誘致し開催を決定したが、同年に勃発した支那事変により国際的孤立が進み、戦時体制づくりの国内事情で、翌年開催中止を決定する。以後、日本のスポーツ界

けた。

人野球は中止となった。戦局が厳しくなり国家総動員体制の中、軍部に協力するということであった。その要因は、三月二十九日に文部省より通知された「戦時学徒体育訓練実施要項」（いわゆるスポーツ統制令）の趣旨に基づくものであった。その訓練種目とは、戦技訓練として行軍・戦場運動・銃剣道・射撃、基本訓練として体操・陸上運動・剣道・柔道・相撲・雪滑（スキー）・球技・闘球（ラグビー）その他適切なもの、特攻訓練として海洋訓練・航空訓練・機甲訓練・馬事訓練であり、野球は含まれていなかったことによる。

V. 戦後の復興と女子プロ野球誕生

（１）．民主々義と女性思想の変遷

昭和二十年八月十五日、日本は連合国によるポツダム宣言を受け入れることにより無条件降伏が決定し、これにより第二次世界大戦が終結する。これにともない国内の社会思想は皇国主義・軍国主義から一転して民主々義へと転換されていく。連合国の占領政策において敗戦後の処理と再建政策の基本は軍国主義の払拭が最重要課題で、政治・経済・教育・思想等あらゆる面において民主化が積極的に進められることとなった。昭和二十一年十一月三日に「日本国憲法」が公布され、主権が国民に存する（第一章）ことを宣言し三権分立した民主憲法として誕生した。戦争放棄（第二章）を宣言し非軍事化を明確にすると共に、国民の権利及び義務（第三章）をも明確にした。この国民の権利を明確にすることにより、自由民権運動から女性解放運動にまで至る争点であった女性の権利獲得を保障された。政治・教育・自由・平等・人格の尊重などが、第十一条「基本的人権の宣言」、第十三条「個人の尊重、生命・自由・幸福追求の権利」、第十四条「法の下での平等」、第十五条「普通選挙」、第二十四条「家族生活における個人の尊厳と男女の平等」、第二十六条「教育を受ける権利」などで明確に保障された。これにより女性の社会進出は、職場への進出、政治活動への進出、高等教育への進出、スポーツ・芸術・文化活動への進出など、広い分野に自主的に進出をしていった。

昭和十八年四月六日文部省通達により学生野球・社会また結婚の自由や家族制度の改革など、女性は意識改革するだけでなく、社会の思想や構造なども一歩ずつ確実に改革していった。

（２）．民主々義と野球

昭和二十一年四月に第一次米国教育使節団報告書の勧告に基づき新しい教育の方向が示された。民主々義教育を図ることを趣旨として、体育・スポーツを重視した指導内容で、その方向は大きな意義を持つものであった。それは体育・スポーツを教育の一分野として位置づけ、スポーツを通して育成されるスポーツマンシップを基盤として民主々義の形成を目的としたことである。そうしたことからスポーツ界だけがいち早く復興の兆しを見た。終戦直後、街には戦災者があふれ、食料確保に目の色を変える飢餓時代であり、焼け跡のヤミ屋時代である。戦災をうけた街は廃墟となり、映画館・劇場等の社会的娯楽も復興していない心の空虚な時、価値観の大転換で世の中が混乱している間に、民主々義思想の注入を図るべく民主化政策の一貫としてスポーツ界が復興していく。連合国占領軍の中核を成すアメリカは野球を国技としており、日本において野球人気が高かったことを熟知していることから、野球復興には理解を示しスポーツ界の中でもいち早く野球が復興していくこととなった。

昭和二十一年の春は、野球復活の春であった。終戦直後から職業野球・社会人野球・大学野球・中等学校野球等、野球復活の準備を整えてきた。野球場確保・野球用具確保等、難問は山積していたが、「野球の時代」を築くために野球界関係者は精力的に活動した。そうした結果、職業野球リーグ戦・全国都市対抗野球大会・東京六大学野球大会・全国中等学校野球大会等が復活した。野球復活を待ち望んだ野球ファンは、各大会に詰めかけ満員の観客であった。その中において、職業野球は八球団に増えファンの熱い拍手に迎えられて人気沸騰する。娯楽のない、心の空虚な時に、「健康で明るい娯楽」を求める人々の、「野球」が多くの人々の心を捕らえていったことは事実である。

（３）．女子プロ野球誕生

野球復活により女子野球熱も急激に高まって、全国各

地で女子野球が復活してくる。そうした中、職業野球の人気沸騰に刺激を受けた女子野球関係者の間に、女子職業野球チーム設立の気運が高まり、戦後の混乱期に急成長した企業が「健康で明るい娯楽」を求めて、昭和二十四年九月に日本最初の女子プロ野球チームとして「ブルーバード」が設立され、その後全国各地で女子プロ野球チームが誕生していく。

昭和二十五年三月二日に女子プロ野球連盟結成準備委員会が開催され、連盟の名称を日本女子野球連盟とし、使用球は準硬球、ルールは硬式野球ルールにより公式試合は九回、非公式試合は七回とする等、大会規定を作成し、連盟運営の準備が行われた。三月十七日に日本女子野球連盟が発足した。加盟チームは千葉の「レッドソックス」東京の「ブルーバード」「ホーマー」「パールズ」の四チームであった。四月十日東京・後樂園球場で女子野球連盟結成記念トーナメント大会が加盟四チームの参加が行われた。それを報道した読売スポーツニュース(四月十五日)の新聞記事の見出しは「なまめかしき熱戦」で、観衆は一万七千人予想にたがわず中年・学生の男性が圧倒的、パーマと肉体ゆらぐなまめいた熱戦に特殊な球趣を満喫してファンは大喜びとある。この記事内容から推測すると、女子プロ野球の誕生は、女子野球選手の野球に対する情熱とは裏腹に、男性ファンは女性が行う野球試合という物珍しさに興味をもち、女子スポーツに対する理解のないままに、女性に対する一種の偏見感を持って歓迎されたと考えられる。これは当時の男性中心的社会思想の現れと言えるだろう。

同年六月発刊の雑誌「野球界」に女子プロ野球見参という記事がある。その内容に、投げ、打つ、捕る、走るのうち、走るのを除いては、つまりスピード感を除いては一通りやれる。と感じたと言う記者の意見である。また六月十七日発刊の読売スポーツニュースの新聞記事に、「女子プロ野球のその後」という見出しで記載されている。最初は新しい物好きの都会人に人気が出たが、目のこえたファンに見透かされると、地方に二ヶ月間の遠征に出た。二ヶ月の間に技術は上達し、そこいらの男子の

試合なら充分勝負になる。と書かれている。男性ファンの物珍しさの人気に甘んずることなく、女子野球選手の情熱の結果と言える。しかしプロ化はされたが、プロ野球球団のスポンサーが大企業なのに比べ、女子プロ野球球団の企業力が弱く、対戦相手のチーム不足等があつて、昭和二十七年には女子プロ野球は事実上の解散に追い込まれた。その当時、社会全体として女子スポーツに対する理解度が低く、社会においてスポーツ思想そのものが未成熟な時期であり、女子野球そのものが未成熟な段階で有るにもかかわらず「健康で明るい娯楽」という商業経営に先走り過ぎたのではないかと考える。その後は企業チームに移行し、最盛期二十六チームを数えたが、昭和四十六年にサロンパスチームを最後に消滅した。

VI. おわりに

明治期・大正期・昭和初期から戦前・戦後を通して日本国内のスポーツ界の発展・普及は国内政策・国際情勢・経済事情・社会思想の変化等が深く関与してきた。そうした中、女性スポーツ界の発展・普及は常に男性スポーツ界に一歩遅れつつ、その影響を深く受けながら成されてきたと言える。社会思想の変化により女性の社会思想も変化し、それにともない女性の社会進出や女性意識の改革が成されることにより女性スポーツが成立してきた。それは常に日本古来の女性観の影響を深く受けながら女子体育の教育思想の改革によるものであった。この期、男性のスポーツ領域と考えられていた野球に女性が進出したことは、日本国内の野球人気の高さを知るだけでなく、女性の意識改革の高さも知ることが出来る。女性が変わり始めた時から女性スポーツが始まり、社会の中で女性が変わる都度に女性スポーツが着実に発展してきた。今後も女性が変わる都度に女性スポーツは確実に発展していく可能性を秘めている。

VII. 附 記

本研究は、平成六年度塚本学院教育研究助成金に基づく研究成果の一部です。この研究に対して多くの方々にお世話になりました。数々のご助言・ご協力を頂いた皆様に、末尾ではありますが謝意を申し上げる次第です。

引用及び参考文献

- 1) 読売新聞「女の暦」1995.1.1朝刊。
- 2) 読売新聞「女の暦」1995.1.8朝刊。
- 3) 前掲1)
- 4) 木村毅著者「日本スポーツ文化史」ベースボールマガジン社 pp110, 1978。
- 5) 西村絢子著者「体育に生涯をかけた女性：二階堂トクヨ」杏林書院 pp77～79, 1983。
- 6) 前掲5) pp74。
- 7) 前掲4) pp111。
- 8) 入江克己著者「大正自由体育の研究」不味堂出版 pp17～18, 1993。
- 9) 前掲5) pp126。
- 10) 「野球界」第拾参卷 第四号 野球界社 pp23, 1923。
- 11) 前掲10) pp2～5。
- 12) 「運動界」第三卷 第六号 運動界社 pp138～139, 1922。
- 13) 「野球界」第拾弍卷 第拾壹号 pp54, 1922。
- 14) 前掲13) pp55。
- 15) 「日本プロ野球60年史」ベースボールマガジン社 pp48～53, 1994。

